

グループ 3 事業評価の問題

(何を成果とみなすか、どの程度なら投資として許容できるか。数値・指標のレベルで具体的に検討)

検討会で出た意見は、4 つの大きな柱で整理された。

1. 「個人の成長」を評価の軸にする

- **挑戦のプロセス評価:** レポートだけでなく、事前研修やグループワークでの「リーダーシップ」「協調性」を評価対象とする。
- **意欲の評価:** 「町に貢献したい」という出発前の高い志やモチベーション自体を、事業の成果として捉える。
- **スキルの可視化:** 英検 4 級取得などの具体的な目標設定や、実力テストを通じた能力向上を明確な指標にする。

2. 「継続性と定住」の捉え直し

- **長期的な追跡調査:** 帰国してすぐの感想だけでなく、3～5 年後にその経験がどう人生に活きているか、アンケートや SNS で継続的に把握する。
- **定住の定義:** 町を離れても「富士見出身」として世界で活躍し、いつか戻ってきたい、あるいは次世代(自分の子)に繋げたいと思う「心の定住」を評価する。

3. 「町の魅力向上と広報」への還元

- **情報のオープン化:** 広報誌「広報ふじみ」や SNS、告知放送を活用し、出発前から帰国後までを町民全体で共有する(QR コードでのアンケート活用など)。
- **交流のシンボル:** リッチモンドにあるベンチのプレートのように、目に見える形での姉妹都市交流の証を町民に伝える。
- **産業・行政交流への波及:** 学生派遣に留まらず、図書館同士の交流や産業交流など、町の活性化に繋がる紐付けを行う。

4. 評価の仕組み(システム)の構築

- **外部評価の導入:** 地元企業や有識者による評価委員会を設置し、客観的な視点で「人材育成の効果」を測定する。
- **ミッション型派遣:** 滞在中に「現地でこれを達成する」という明確なミッション(種まき)を課し、その実績を評価に繋げる。